

## 富士山北東麓における新富士火山テフラ年代の再検討

## Reconsideration of the Eruptive Ages of the Younger Fuji Volcano in the Northeast Area of Fuji Volcano, Central Japan

# 田島 靖久[1], 阿部 徳和[2], 児玉 浩[1], 久保 尚[1], 宮地 直道[3], 小泉 市朗[4], 小野 弘道[5]  
# Yasuhisa Tajima[1], Norikazu Abe[2], Yutaka Kodama[3], Takashi Kubo[1], Naomichi Miyaji[4], Shiro Koizumi[5], Hiromichi Ono[6]

[1] 日本工営(株), [2] 日本工営・地質部, [3] 野茶研, [4] 富士砂防, [5] (財)砂防・地すべり技術センター

[1] NIPPON KOEI CO.,LTD, [2] Nippon Koei CO., Ltd., [3] NIPPON KOEI CO.,LTD., [4] NIVTS, [5] Fuji Sabo, [6] SABO Technical Center

## 1. はじめに

富士山のハザードマップを作成するためには、活動の最新期である 2000 年前以降の降下火砕物(スコリア)の噴出源、分布、規模等を詳細に把握する必要がある。新富士火山のテフラ層序はこれまで東麓を中心に詳細に解明されてきたが(泉ほか、1977 など)、北東麓については未詳の堆積物が多く(上杉ほか、1987; 小山、1998b など)必ずしもその層序は確立されていない。そこで、富士山の北東斜面から北東麓の地域で地表調査およびトレンチ調査を実施し、当該地域のテフラ層序の解明を図った。

## 2. 調査地点の概要

北東斜面の富士吉田市では、滝沢林道沿いの標高 1900 ~ 1990m 地点で地表調査および法面掘削調査を行った。本地区にはこれまで多数の比較的新しい時期のテフラが存在することは知られていたが、その層位は不明であった。一方、北東麓の山梨県忍野村角原ではトレンチ調査を実施した。調査地点は、「古忍野湖」が形成した低地(忍野盆地)の縁辺部にあたる。

## 3. 調査結果

## 1) 北東斜面調査結果

北東斜面では地表下に計 34 枚の降下スコリア層および粗粒火山灰層が確認された。これらのテフラ層とその直下の溶岩との境界部にあたる土壌から  $1650 \pm 40$  cal.y.B.P の放射性炭素年代値が測定された。降下スコリアの多くは粒径が大きく、火山弾状のスコリアを含むことから、比較的近い位置に噴出源が存在すると推定される。ただし、今回の調査では噴出源の特定には至らなかった。岩相および層位から判断してこれらの降下スコリア層の一部は、S-24-1 ~ 10 のいずれかに対比される可能性が高い。

## 2) 忍野村トレンチ調査結果

トレンチ掘削を行った結果、地表下 3.2m の間に 33 層の新富士火山起源と考えられる降下スコリア層及び 1 層の降下軽石層が確認された(Fig.1.)。ここでは上位から降下スコリア層は OsiSc1 ~ OsiSc33、降下軽石層は OsiPm1 と仮称する。岩相上の特徴などからこのうちの 15 層の降下スコリア層は、湯船第 2 スコリア(Yu-2)、S-18、S-17-3、S-17-2、S-15'、S-14-1、大室スコリア(Om)、S-11、S-10、S-9、S-8、S-7-1、R-II、R-I、S-4 等に対比され、また、9 層は不確実ながら既知のテフラに対比される可能性がある。また、現時点で明らかに対比できない降下スコリアは 9 層あり、今後これらについての検討を行う必要がある。OsiPm1 は、火山ガラスの形態的特徴および屈折率から、伊豆天城火山起原のカワゴ平降下軽石層(KGP)と認定された。KGP の噴出年代は 3,060 ~ 3,190 yrsBP と推定されている(嶋田、2000)。忍野スコリア(Osi: 新称)は北東斜面から北東麓に厚く分布する降下スコリアで、KGP より下位で S-10 よりも上位に位置する。一方、Yu-2 の上位の Sc1 ~ Sc4 は S-24-1 ~ 10 のいずれかに対比される可能性が考えられる。

加速器質量分析(AMS)による放射性炭素年代測定法より 22 点の土壌および木片の放射性炭素年代値を測定した。その結果、上記の降下スコリアに年代を与えることができた。ただし、OsiSc26 よりも古い年代値に関しては従来の年代値との隔たりが大きく、さらに今後の検討を必要とする。

